



幼児期の多様性受け入れ 基礎を育てるには



常磐会短期大学教授 ^{しめだ} 卜田 ^{しんいちろう} 真一郎 さん
帝京短期大学教授 ^{はやし} 林 ^{めぐみ} 恵 さん

人権保育専門講座では、今年度も専門性を高める研修として、連続講座を開催しています。第1回は10月8日、常磐会短期大学の卜田真一郎さんから紹介いただいた帝京短期大学の林恵さんと会場（三重県人権センター）をオンライン会議システムで結び、「幼児期の多様性受け入れ基礎を育てるには」と題してご講演いただきました。後半は、卜田さんと林さんのトークセッションを行いました。

外国にルーツのある子どもの受け入れにおける現状と課題

入園当初、外国にルーツのある子のもっとも気になる姿について、6割近くの保育者が「指示が通らない」「話をしようとしなない」とこと挙げている。一方、「子どもは、わからなくてもみんなと一緒に遊ぶし、思ったより、ずっと早く日本語が話せる」と楽観的に考える保育者の声もある。

「子どもが日本語を話せると嬉しかったし、お母さんが日本語で話をしているのも好意的に感じる」など、私たちは知らず知らずのうちに日本人に合わせることを求めているのではないだろうか。日本人に合わせることを評価しているのではないだろうか。

母語で考える重要性

言葉は、言語単独では獲得されない。その場面とすべての五感をとおした感情と結びつくことで、吸収される。だから、頭のなかで考える言葉（内言語）を育てていくことが必要となる。すなわち、第一言語として、家族で抽象的な事項が語り合える言語を選択することが大事なのである。母語がきちんと使えることは、アイデンティティ形成に大きくかかわる。子どもにとって、安心できる環境下で、豊かな経験と感情とともに母語があることが必要なのである。

家庭で母語・保育所で日本語を

母語の保持

- ・保護者に家庭では、母語を使い、保育所では、日本語を使うことを保育者が説明する。
- ・家庭での母語教育だけでは不足する場合には、母語教室を勧める。
⇒困難な場合は、保育所での保護者支援が頼りになる。

日本語の保持

- ・保育者はより幅広い日本語表現を伝えるかかわりをもつ。
（「大きい木だね」「大きくて高いね」「幹が太いね」等）
- ・言葉の獲得は感情と密接にかかわっている。話しかけさえすれば、OKではない。
- ・豊かな言葉を得るための対応は、日本人、外国人関係なく必要である。

林さんが監修した保育者向けリーフレット「外国にルーツのある子どもの育ち～保育者の方へ・言語習得編～」をいただきました。必要な方は事務所までご連絡ください。

【参加者のアンケートより】

- いろいろな国にルーツのある子どもの保育をするなかで、母語を勉強しきれず、つい日本語や英語の単語、身振りで伝えてわかってもらっている気でした。小学校、中学校と進学していくにつれ、欠席が増え、勉強がわからず(ついていけず)学力の差が出てきているのが辛かった。日本語教室はあっても、母語を支援するセンターの活動を知らなかったのととても驚いた。支援の輪が広がっていくにはどうすればよいのか知っていきいたいと思った。
- 本人のわかる言葉、いわゆる母語を使う時に大切にすることとして、本人がわかることで気持ちを共有したいときや、安心できるような関係をつくっていくときが大切になることも覚えておきたいと思った。また、日本語を獲得していけるようにするために、子どもが今感じていること、体験していることを積極的に共感しながら言葉にしていくことが大切ということも知った。しかし、日本語を覚えていけるようにするために、日本語を使う保育のなかで保育者の思いどおりになるよう合わせることを、馴染むことが評価にならないようにしたい。